# 新装版「作家にきく」no.5

「京都市美術館ニュース|第14号(昭和33年)より連載していた「作家にきく」。 装い新たに再スタートを切りました。第5回は松本泰章さんです。

# 松本泰章(まつもと・やすあき)

1958年兵庫県神戸市に生まれる。1982年に京都市立芸術大学美術学部を 卒業。1994年から2年間、ZKM (Center for Art and Media Karlsruhe)の 映像メディア研究所で研究と制作を行う。1991年から砥綿正之(1959-2019) との共同制作を開始し、断続的に作品を発表する。代表作は《DIVINA COMMEDIA》(1991年)、《重力と恩寵》(1995年)など。哲学や宗教、科 学などの多領域を横断的に作品に取り込み、メディア・アートの可能性を広 げてきたパイオニアである。現在、嵯峨美術大学教授。

#### towata+matsumotoの出発点と軌跡

砥綿正之とは大学に入学してすぐ友だちになりました。卒業後に彼 がパリに留学して帰ってきて、二人でいろいろ模索を始めたとき、新 しいテクノロジーはとても魅力的で、アイデア優先でいろんなことを 考えました。まだコンピュータは高価で十分に使えなかったので、い かにそれっぽく見せられるかを試みましたね。手描きの絵を写真に 撮って、それをTVモニターに流して撮影したら、CGですか?って聞 かれました(笑)。当時の技術で可能なことの現実も知っていたから、 自分たちの構想を実現するのは、まだ難しいと感じていました。

僕たちは1991年に《DIVINA COMMEDIA》をXEBEC HALL で、翌年それをコンパクトにした作品を水戸芸術館で発表しました。 その頃、砥綿は成安女子短期大学(当時)に就職して、ヨーロッパ へ視察旅行に行きます。新しい動きを求めていた時期に、海外で起 こっていたメディアアートの動向をリサーチしてきたんです。ドイツに はZKMという研究所があり、砥綿が繋げてくれて、1994年に僕は そこで制作することになります。同年、砥綿は京都市立芸術大学に 勤め始めました。続けて僕たちは1995年にZKM、1997年にICC (NTTインターコミュニケーション・センター)、1999年に宇都宮美術館 で作品を手掛けます。その時にある技術を使いながら、自作の手作 業も面白がってやりました。2009年からは大覚寺で国内外の最先 端のアートを紹介する展覧会を砥綿と計画し、作品も制作します。 2017年の《Winter solstice》が二人で完成させた最後の作品です。

2019年に椹木野衣さんから《DIVINA COMMEDIA》の記録 映像を展示する話をもらった直後、砥綿がとても難しい癌であるこ なってしまったんです。

### ダンテの『神曲』に結びついた未踏の試み

《DIVINA COMMEDIA―死のプラクティス―》(1991)は、当時は まだなかった体験型の作品です。人は死んだらどうなるのか?という 問いから構想して、Near deathつまり臨死体験をシミュレーションす る方向へ進みました。考えているうちに、ダンテの『神曲』の構造に



LICHT: Breath of Light | 2022年、 京都市立芸術大学 ギャラリー@KCUA 撮影:来田猛



左:松本泰章/右:砥綿正之 撮影:青柳菜摘(thoasa),2018年撮影

似ていることに気づいて、原題のイタリア語をタイトルにしました。

巨大なプールに10トンのゼリーを入れて参加者を浮かべ、強力 な光でフラッシングするという前例のないアート作品です。音はサウ ンドアーティストの藤本由紀夫さんにお願いしました。青い光の中で 静かなノイズを聴きながら浮遊し、最後に激しい閃光と爆音に包ま れる。ダンテが天国に登っていく場面を体験するんです。医師にも 関わってもらいバッドトリップの心配もクリアしましたが、監視役は置 いて、ダンテを天国へ導くベアトリーチェという設定にしました。

「平成美術: うたかたと瓦礫(デブリ) 1989-2019」展で当時の映 像を準備するとき、亡くなった砥綿の研究室に当時のアナログ音源 の大きなリールが残っているのを見つけて、それをデジタライズし、 実際に使った音源を美術館で聞いてもらうことができました。そして 古いVHSから15分のイメージビデオを作りました。映像作家の稲 垣貴士さんが撮ってくれたものと、監視カメラの記録を重ねて編集 した映像を上映し、作品を追体験する展示を行ったんです。

## アートの本質とメディアアートのこれから

《LICHT》は写真作品に取り組んでみようというのが始まりでした。 砥綿が「もうタイトルは考えてる。作品はまだないのにね(笑)」と言っ て。その矢先に病気がわかったからプランは一緒にできなくて、二 人の名前で出していいか悩みました。でも僕たちはずっと光に関わっ てきたし、砥綿が題名をくれたから大丈夫だと思ったんです。

副題のBreath of Lightは僕が決めました。自分も以前癌になって 助かったけど、砥綿は亡くなり、COVID-19の肺炎でも人が亡くなっ とがわかりました。すぐに手術をしましたが、その数ヶ月後に亡く て、光って何だろう? 誰がいなくなっても絶対にあるから、生と死も 越えて、呼吸と光が交合したらどうなるのか? と考えました。 きっと 砥綿の考えも同じだと思います。僕らは「芸術家にとって最も大事な のは孤独だ」という意味のリルケの詩を介して友人になったところが あって、少し矛盾するけど、孤独な作家がたまたま一緒にいて、一 人が死んでも二人で作っている。役割分担で括れないし、この作品 も彼の周りにいる人たちが手伝ってくれてできたんです。

> 僕たちは、科学や哲学や文学や音楽など、さまざまな分野と歴史 を横断しながらやってきました。メディアアートにはインタラクティブと バーチャルリアリティという2つの大きな要素があって、日本に伝わっ たとき、後者は仮想現実という語に訳されます。技術的にはそうで も、アートが扱うVirtualは奥深くて、それは見えないけど大切なもの という価値観です。常に未成熟なデジタル技術こそ、アートの本質 を捉える可能性があって、そのためにはデジタルネイティブにも期待 したいし、他分野への興味と知見も重要だと思っています。

> > (聞き手:当館学芸課/構成:かなもりゆうこ)



京都市京セラ美術館ニュース

Mar. 2023 **220** 

発行目: 令和5年3月 京都市印刷物 第044997号 編集・発行:文化市民局美術館 京都市左京区岡崎円勝寺町124 Tel 075-771-4334 https://kvotocitv-kvocera.museum







・」の開催に向けて

現代アートやデザインの領域を横断し、自然と人工、過去と未来など多様な関係性を新たな視点でとらえる「跳躍 するつくり手たち」。環境問題、感染症や戦争など人類共通の課題を抱える私たちがサバイバルするための「創造」 とは?――本展の監修者である川上典李子さんに、展覧会のコンセプト、その背景、そして「つくり手たち」の未来へ の「跳躍 | についてお話を伺いました。

を発想するに至ったきっかけをお聞かせください。

川上 デザインだけでなくアートや他分野に関わる方々ともずっ とやり取りを続けていて、その内容がより濃厚になってきた時期が この企画の直前でした。COVID-19が起こる前ですね。劇的なきっ かけというより、継続のなかでのポイントがいくつかあると思って

まず、デザイン展の企画にご一緒させていただくなかで、さまざ まな話をお聞きする機会を頂戴した三宅一生さんからの影響は大 きいです。物事を複数の視点から見つめ、「長い歴史上で人間は 未来をつくり出せる創造性をもった存在だ」ということを体現され た方でした。

そして、海外での展覧会の経験で、ジャンルや時代を超えて「人 間がつくること」について考える機会が増えてゆきました。一例で すが「ロンドン・デザイン・ビエンナーレ2016」では、社会に対して デザインの側から働きかける意識が共有され、領域を超えた意見 交換の場を持とうという提案が実現していました。

また、2018年に携わったパリの装飾美術館での「ジャポニスムの 150年」は、日仏文化交流の歴史のうえで現在を見据えて未来を考 え、150年前から現在の工芸、デザインまでを結ぶ仕事となりました。

----本展のコンセプトの軸となるキーワードとして「アントロポセン (人新世)|を掲げた理由は何でしょう。また感染症や戦争によって 人類共通の問題意識は明確になりましたか。

川上 ものをつくる人の直感なのか、この5、6年、若い方たちとの 対話のなかで、地球や長い時間軸の話が増えました。そこで挙がっ てきたのが「アントロポセン」です。遠くにも目を向けて考えなけれ ば、という危機感を共有しはじめたタイミングでの展覧会のお話で した。実際にCOVID-19による危機的状況になり、思考を柔軟にし て生きていこうという共感が起こります。現在の争いに関しても本 当に深刻です。でも、私たちは創造する生き物なので、その力を信 じて立ち上がることが重要です。

――タイトルの「跳躍する」そして「つくり手たち」に込めた思いは 何でしょう。20作家の選定とも関連しますが、時間を超えた、人間 固有の創造性へと原点回帰するものでしょうか。

川上 人間の力を信じて自ら上方前方に跳躍し、そこで持ち得た 新しい視点を周りに示してくれる作家を選びました。聡明であると 同時に、ある種の筋力・腕力を大事にしている方々です。自然や 人工、過去と未来をつなぐには、身体性を伴う意志がないと表現

TAKT PROJECTは、デザインと他分野をつなぐという意味で象 徴的な存在です。《glow ⇄ grow: globe》は、人間の意識によって 切り離されてきた自然と人工の対話を探るリサーチによる作品で、 制御技術を持つ彼らが、それとは対照的な自律の、そして未完の 状態を持ち込み、想定外の事も受け入れることについての考察を 私たちにもたらします。作品は会場で成長していくのですが、会期 終盤にどのような姿になるのかは、私もまったく予測できません。 代表の吉泉聡さんの言葉を引用すると、「Evoking(思考を喚起す る)」オブジェです。また、新作の《black blank》では、都市を離れ、 自然に関する「知覚のあり方」のリサーチを始めた彼らの活動、思 索の進行形も見ることができます。

GO ONは、京都の伝統工芸の後継者たちのユニットで、家業は それぞれ違いますが、過去をつなぎ未来を担う者として切磋琢磨 し、互いに意見交換をしています。彼らに「100年先」というお題を

--- デザインの分野に長年取り組んでこられた川上さんが、本展 出したら、「修繕」というキーワードを返してくれました。それはただ 元の形に整えるのではなく、前よりも良いものを人間の叡智と技術 でつくることを、自らが示そうとするものです。

> - 各作家の特徴であり共通点は、英語タイトルにある「Visionaries (先見性を持った人々)」ですね。自分たちが置かれている状況を咀 嚼し、そこから提案するビジョンとはどのようなものでしょうか。

> 川上 いま元気な世代の特色として、依頼されたデザインだけで なく、自らが関心を向ける課題を自主プロジェクトとして研究して います。考え方、あり方そのものを提案し、そこから始まる対話を 大切にしていることも興味深い点です。

> 若い彼らの経験値は限られているから、もがきながら獲得した 先見性の面白さもあります。現在形の活動は美術館では紹介され にくい実験的な試みですが、考えながら動く人たちの果敢な跳躍 です。しかしそこに無謀さを感じないのは、地球への畏敬の念や、 物事への向き合い方を大切にした客観性があるからです。誤差や ゆらぎ、人や素材との対話に関心を持ち、造形優先でなくても結果 が美しい。おのおのに異なる美のあり方があって、そこには私たち を元気にしてくれる力が宿っています。

> ――我々はこれからどのような未来を築いていけるのか、本展の 監修をするプロセスのなかでの発見や、「つくる」ことと人間との 関係などについて、メッセージがあればお願いします。

> 川上 自分たちの価値観、世界に対する眼差しの持ち方を意識す ることでデザインそのものも広がります。IからWeへ、共有しうるも のにすることも、人間だからできることです。

この展覧会は「人間ってなんだろう」ということに目を向けてい ます。変動していく世界で、創造力の素晴らしさを思い出し、自分 で考え、ほかの人と意見を交わし共有する。未来に明るさを見出し て、前を向いていけるものにしたかった。

本展カタログに寄稿してくださった生物学者・福岡伸一さんの 文章との共鳴は、予期せぬものでした。機械と人間、過去と未来、 跳躍と運動の身体性、悔恨も希望もあること、そして人の心の動き と創造の関係まで、見事につながっています。



TAKT PROJECT 《glow 

grow: globe》 2023年、写真は2019年 時のリサーチ記録 Photo: Ota Takumi



川上典李子(かわかみ・のりこ) 本展監修者。武蔵野美術 大学客員教授。デザインを中心としたジャーナリストとし て活動するほか、21 21 DESIGN SIGHTのアソシエイトディ レクターを務める。「現代日本のデザイン100選」(国際交 流基金主催) 共同キュレーター、パリ装飾美術館 「Japon-Japonismes, objets inspirés, 1867–2018 l (2018年) など 国内外の展覧会企画にも携わる。

特別展「跳躍するつくり手たち:人と自然の未来を見つめる アート、デザイン、テクノロジー 2023年3月9日~2023年6月4日 会場:新館東山キューブ





展示風景

京

都

の

帝室技芸員

特

別

展

∽綺

羅

め

京

治

美

世

た

室

技

芸

員の

木博

志

「綺羅めく京の明治美術一世界が驚いた帝室技芸員の神業」を 観て、その作品群の美しさ、質の高さに驚いた。

私は近代天皇制を、京都や奈良の地域の歴史からみた研究を している。「京都」と「帝室技芸員」を切り口とした、この展覧会は、 とてもおもしろかった。それは明治維新をへて、日本が国際社会 に乗り出していく1890年代に、古社寺や御所、名所旧跡を有する 「みやこ」において、近世朝廷・権門社寺とともに発展してきた京 都画壇や美術工芸の伝統的価値を、国家が公認したからである。

古都京都の伝統性は、明治維新直後の文明開化状況におい ては、近代化の障害になるものとして否定された。廃仏毀釈から 1869年(明治2)の東京遷都により京都御所は衰微し、延暦寺や 東寺の宮中の密教儀礼は廃止され、八坂神社や石清水八幡宮の 神宮寺はなくなって「魔界」のごとしと評された。しかし欧米にお ける日本文化の評価は違った。19世紀後半のヨーロッパでは、東 洋への憧憬の極に日本があり、印象派やブルジュアジーは浮世 絵や伝統工芸のジャポニズムに魅せられた。また19世紀後半は、 イギリス・フランス・オーストリアなどの国民国家が、独自の文化 的アイデンティティを発見し競い合う時代でもあった。それぞれ多 様な王室儀礼や、ドイツ音楽、フランス美術など、独自の文化的伝 統を国家の威信としていった。ここに「開化」一辺倒であった明治 政府や京都府は、古都京都の伝統を一転し評価することになる。 1883年(明治16)の岩倉具視の建言を画期として、京都御苑が整 備され、賀茂祭・石清水放生会が復活し、奈良・京都の古社寺へ の保存策がはじまり、文化財・美術品の調査・保存がはかられて いった。

1888年(明治21)に伊藤博文は、キリスト教の精神的支柱のない 日本において「皇室のみ」が国家の基軸になると述べた。同じ年、 オピニオン・リーダーの福澤諭吉は、「尊王論」において、「栄誉の 源泉 | としての皇室が諸技芸(書画・彫刻・挿花・蒔絵・織物・陶器

のは、「本邦美術を奨励する為め、古を徴し今を稽へ、工芸技術 を錬磨し後進を誘導する」(「帝室技芸員命令書」)こととなった。 私が興味を持ったのは、室町一条に住んだ富岡鉄斎や、京都 とである。従来、皇室の文化は、和洋の関係性だけで語られてき

など)を保存し奨励することで、皇室への国民の崇敬が集まると論

じた。かくして1890年(明治23)設置の帝室技芸員に求められた

で修学した野口小蘋といった南画家が帝室技芸員に選ばれたこ た。しかし1877年(明治10)の奈良行幸において、明治天皇が休む 行在所の室内の飾り(しつらえ)は南画家の鉄斎が担当した。東大 寺・東南院の天皇の目の前で、中国文物の頂点にある南洋の香 木・蘭奢待がきりとられ、蘭・盆石・鼎などで飾られた室内は至 高の香により満たされた。すなわち南画をはじめ中国文化は、皇 室に不可欠であった。本展で望月玉泉の大和絵の風景画「宇治 川上流之真景図」も展示されたが、1922年(大正11)には、鉄斎が 宇治を中国の赤壁に見立て、文人・内藤湖南や長尾雨山と集う、 もう一つの宇治があった。

太田智己・山本真紗子両氏によると、明治期、円山周辺のホ テルに泊まった外国人は、隣接する祇園で都踊りをみて、知恩院 門前の骨董商から一番優れた美術品は対面で購入した。さらに粟 田から岡崎へと山中商会、京焼の錦光山、そして帝室技芸員・並 河靖之の七宝工房へと足を運んだという。1902年(明治35)に京 都高等工芸学校が吉田に開校する目的も、東京美術学校の「純 正美術」、東京高等工芸学校の「普通工業」の図案とも違う、京都 に根づいた「美術工芸」の実業教育にあった。戦前の修学旅行で 京都を訪れた学生は、帝室技芸員・清風与平・宮川香山ゆかり の京焼を五条坂の京都市陶磁器試験場で、そして西陣織を堀川 今出川にあった川島甚兵衞の川島織物において、制作過程を知 り作品群に接した。

改めて思うのは、四条派を継承し海外体験もある竹内栖鳳と 山元春挙が帝室技芸員として権威づけられた意義である。二人 が京都市立絵画専門学校や京都画壇で後進を育てた豊かさを、 十田麦僊·村上華岳·小野竹喬、そして国画創作協会同人らの 画業に感じる。

一つ、展覧会への注文は、帝室技芸員を近現代史に位置づける、 図録所収の後藤結美子・森光彦両氏の優れた論考を、もう少し 展示にも反映していただけたらと思った。

高木博志(たかぎ・ひろし) 1959年大阪府吹田市生まれ。立命館大学文学研究科博士 課程修了。博士(文学、北海道大学)。北海道大学文学部助教授などを経て、現在、京 都大学人文科学研究所教授。主な著作に『近代天皇制の文化史的研究一天皇就任儀 礼・年中行事・文化財」(校倉書房、1997年)、『近代天皇制と古都』(岩波書店、2006年)、 『京都の歴史を歩く』(岩波新書、2016年、共著)などがある。

#### 展覧会情報

特別展「綺羅めく京の明治美術―世界が驚いた帝室技芸員の神業」 2022年7月23日~9月19日 会場:本館 南回廊1階



望月玉泉《宇治川上流之直暑図》明治期 京都市美術館蔵